

光明寺

寺号 真言宗智山派稻林山寶性院光明寺

本尊 阿弥陀如来像 作者春日

脇仏 弘法大師像 作者年代不詳

興行大師像 作者年代不詳

縁起・沿革・由来

『新編武蔵風土記稿』には、新義真言宗、粕壁宿最勝院の末、稻林山と号す。開山祐

意、永正十一年【一、五一四】示寂、本尊阿弥陀、春日の作。観音堂、古は行基の刻る弥勒の像を安ぜしゆへ、弥勒堂と云しが、其後焼失せし頃より、観音を安じ、唱へもかわれりと云、薬師堂光明寺持、と記されている。

『武蔵国郡村誌』には、「光明寺」村の東方字裏耕地にあり、新義真言宗埼玉郡粕壁宿最勝院の末派なり、『風土記』に開山祐意、永正十一年示寂すと云ふ。と記されている。

『寺の伝記』 「一」

故老からの伝えによると、戦国時代初期の第百四代、御柏原天皇の御代に創建された

と言う。開祖は権大僧都祐意法印と伝えられている。過去において火災等により、寺の歴史は不詳である。開基・開山の由緒は不明であるが、伝えられるところによると、この寺は、旧陸羽街道沿いにあり、【現在の武里駅付近：俗にお墓山と称される地点】丘陵地にあって、稻荷大明神の社と共にあつたので、稻林山と号したと伝えられている。

また故老の話しによると、この寺は、元は天台宗の寺であったことが、古い時代から

言い伝えられている。詳細については筆者【須賀】も、ご教授頂いた方が亡くなられてしまったので、その委細は不明であるが、中世には、大きな寺であったようである。

「三」

現在の寺は、粕壁の最勝院の末派であって、その中でも、最勝院の末寺十三坊中の第

一坊である。

◎註 【筆者須賀の推定】最勝院は、創建の際は天台宗であって、その後

なって、真言

宗智山派に属したことが判っているので、この寺が元は、天台宗に属していたもの

と思考される。

「四」

吞龍上人が幼少の頃、真言宗光明寺が寺小屋を開いていた時、市野割村から、この寺子屋に入門して通い、読書・習字・礼法等を学んだという。

【浄土宗全書に、このことが記載されている。】

その他 「一」

境内の本堂左前に大きな宝篋印塔がある。これは、新方領耕地整理事業の功績者で当

時、大場に居住していた原又右衛門氏の墓である。また、門前には、原又右衛門氏の頌徳碑【新方領耕地整理事業の功績を称えた碑文が刻まれている

る。】

「二」

境内の入口左側に、お堂がある。「俊弘堂」という。これは、最勝院の中興開山俊弘法印の実家が大場村の萩原家であり、光明寺の檀家であるところから、後世に建立された。

圓福寺

寺号 浄土宗大河山華藏院圓福寺

本尊 阿弥陀如来像 寛文七年九月七世招誉上人・的翁上人作

脇仏 右側 観音菩薩像 作者年代不詳

〃 善導大師像 作者年代不詳

左側 勢至菩薩像 作者年代不詳

〃 法然上人像 作者年代不詳

本堂内右手に吞龍上人坐像 作者年代不詳

縁起・沿革・由来

『新編武蔵風土記稿』には、浄土宗、平方村林西寺末、本尊阿弥陀、開山祖岌は当郡の人にて、瀧山大善寺第三世吞龍に嗣法し、承応元年【一、六五二】示寂せし由、浄土宗傳燈系譜にみえたり、と記されている。

『武蔵国郡村誌』には、「圓福寺」村の東方字諏訪にあり、浄土宗埼玉郡平方村林西寺の末派なり。

○風土記に開山祖岌は埼玉郡の人にて、瀧山大善寺第三世吞龍に嗣法し、承応元年示寂せし由【浄土宗傳燈系譜に見えたり】と載せり。と記され

ている。

『寺の伝記』 「一」

圓福寺所蔵の版木で沿革と寺宝を記した版木の一部に次の様な文がある。

【光世上人作】

「當麻曼陀羅木彫変相之縁起」

武州埼玉郡新方之庄市野割村大河山華蔵院圓福寺、往古、同郡江曾堤【註
江曾堤とは、蝦夷堤のことで、平安時代に東国の先住民族の同化政策が
行なわれた頃、これらの部族の築造した堤に名付けられたもの、【詳しく
は拙著『埼玉ふるさと散歩春日部』を参照】この堤の上でありしとなり、
本尊は阿弥陀仏【御長弍尺三寸立像】恵心僧都の真作也。世々移りて久
し、何の誰人の初開なることをしらず、山頭に神祠あり、香取大明神の
靈社にして即ち是當山の鎮守新方之庄氏神なり、社前に鰐口あり其銘に

曰く、享徳三年新方之庄市割日本願末太郎とあり、又願状あり末太郎幼稚の時疾病おもく犯して八歳に到る迄歩む事かなわず、父母、是を愁へて深く此神を祈り終に病癒て成長し、堅固安穩也豈此神の靈徳にあらずや、新に社を建て美を尽くし又寺を作り塔を建て結構せり、凡今年に到りて二百五十一年なり、此神の本地は十一面觀世音なるを以て、行基菩薩の真彫、【御長壺尺の尊像立給ひて其靈瑞のあらたかなる事古今数を尽くすべからず、又當寺に古へより伝へて称賛浄土経一卷あり、是中将法女の真筆なり、彼法如比丘尼は幼少にして母をくれたまひ、継母のために讒せられて深き山にすてられ悲しみの余り有為を壓ふ志厚く。と記されてるが、【この版木は続きがないので、この先が不明である。】

◎この縁起の中にある事項については、『新編武蔵風土記稿』の中に「香取社」として、次のように記されている。

「香取社」村の鎮守にて円福寺あずかれり、村内にわずかの堤あり、当所にては其名を

唱へざれど、粕壁宿の辺りにては江曾堤とよべり、此社古へ其堤上にありしを前にいへる井上将監【呑龍上人の父】及び大熊弾正などといへるもの、力を合わせ当所に引き移せりと云。文禄元年円福寺の住僧祖岌が書せし縁起あり、其略に当社元新方領の惣鎮守にて、本地十一面觀世音は行基の作なり、昔享徳三年末太郎といへるもの、奇異の靈護を蒙り、鰐口を寄進せり、又平方村林西寺中興呑龍和尚立願せしに、其験ありしことなど、こまごまと書つづれど、させる證とすべきこともあらざれば、其要を摘てここに録す、と記されている。

「二」

この寺の九世和尚の光世上人【定蓮社生誉光世尊応和尚】は多くの版木

を刻し、また現在境内の宝蔵庫【曼陀羅堂】に安置されている各彫刻も、この上人の作である。

「三」

寺の名称の大河山とは、筆者は【埼玉ふるさと散歩春日部】の中で論じているが、その由来は、往古、利根川の濫流時代の流路が粕壁の八幡様の裏側を流れ豊春地域から屈曲して、薄谷から現在の武里中学校付近から藤塚方面に流れていた時代の川岸に立地していたところから、このような山号が称えられたものと思考される。

『寺宝』

「一」

浄土曼陀羅彫刻【厨子入り】縦一間三尺五寸・横一間二尺【文禄録年起刀・文禄十一年竣工】九世光世上人作。自叙及び版本に刻す。

「二」

閻魔王宮並び百三十地獄像・縦一間二尺・横三間四尺【文禄十三年起刀・十五年竣工】九世光世上人作。自叙及び版木に刻す。

「三」

釈迦涅槃像【厨子入り】縦一間三尺三寸・横一間二尺。九世光世上人作
自叙及び版木を刻す。

◎註 右記の像は全部九世光世上人の木像彫刻で一つ一つ丁寧に彫刻され、
さらに彩色

された非常に貴重な文化財であり、現春日部市指定の文化財となつて
いる。

「四」

版木、右記の版木の外多数の寺に係する版木、九世光世上人が刻され

たものが寺に保存されている。【ここではその内容の詳細については省略する。寺に参拝の際に閲覧されることを、お勧めする。】

「五」

板碑【青石塔婆：中世の供養碑】

「六」

史跡天然記念地【呑龍上人生誕地并得度出家の由緒寺として、昭和三年三月埼玉県史跡天然記念地に指定されている。

『呑龍上人と呑龍子』

子育て呑龍として世に知られている群馬県太田市金山にある大光院【義重山新田寺大光院】の開山祖呑龍上人は春日部市大字一の割の浄土宗圓福寺【土地の人は、“どんりゅうさま”の別名で呼ばれている】の門前にある井上家が生家である。

呑龍上人は、岩槻城主太田美濃守資正【後に入道して三樂齋と号す】の家臣で知行地

を市野割に持つ、井上将監信貞、妻真弓の次男として、弘治二年【一、五五六】に誕生。

名を龍寿丸という。幼児期は、近くの寺【圓福寺】の影響を受け、遊びも泥で仏像を造

ったり、念仏を唱える子供であったという。七歳の時、寺小屋【大場村の真言宗光明寺】

に入って、読書・習字・礼法を学び、人々から神童とたたえられた。

永禄十二年【一、五六九】の春、十四歳の時、浄土宗白龍山林西寺【越谷市大字平方】

第八世岌辨和尚の弟子となり、八月に得度して名を曇龍と号した。後に悪

龍を呑む夢を

見て、呑龍と改名したと伝えられている。

元龜元年【一、五七〇】四月、十五歳の時、岾辨和尚の推薦によって上京、増上寺の

学寮【当時の最高学府であった】に入る。観智国師「源誉上人」の弟子となり修業。後

に入洛して然誉上人の勅号を拝受す、年二十九歳也。間も無く岾辨和尚の懇請により、

林西寺の住職の後を嗣がれ、十七年間地方の教化に尽くされた。

天正十八年【一、五九〇】徳川家康が江戸に入府、家康は観智国師と共に呑龍を招き

城中で法談を聞き、その秀抜を賞賛、学問料として呑龍に五十石を贈り、

その後も数回

林西寺に吞龍を訪ねている。

慶長五年【一、六〇〇】武州滝山【八王子】の大善寺の住職となり、同十八年観智国

師の信任を受け、大光院の開山として太田に來住した。吞龍五十八歳。この大光院とは、

家康の祖先新田義重の追善供養のため、旧城跡付近の金山に建立されたものである。当

時、農民の生活は非常に貧しく、そのために生まれてくる子供を養育することが困難で、

背に腹は替えられぬ農民はやむを得ず、国では固く禁じられていた「間引き」をして人

口を制限していた。呑龍はこの悪習を嘆いて、村々を説いて廻り、貧しい者には救いを

与え、寺領三百石は貧児養育の糧として提供した。本来寺領は寺の維持や学僧養成のため

のものであるが、一山の僧にも質素節約を奨励して貧児救済にあたった。

幕府は驚き

呑龍に善処方を命じた。呑龍は困惑してしまい、結局子供が生まれたら七

歳迄は大光院

の弟子とすることを考え、その処置を講じて貧児救済にあたった。『呑龍子』

とは、七ツ

坊主といって頭髪を形に残すことにして弟子入りしたと認めた風習で、最

近まで続いて

いた。これが「子育て吞龍」といわれるゆえんである。【現在は七・五・三祝】。

吞龍上人は元和八年【一、六二二】後水尾天皇より紫衣の勅許の論旨を賜り、元和九

年八月九日、齡六十八歳で入寂された。しかし、吞龍上人の高徳に寄せられた庶民の尊

敬の念は今日まで引き継がれている。

圓福寺では、毎年四月八日に吞龍上人のお開帳が行なわれていて、大光院と同様に『吞

龍子』の風習が最近まで行なわれていたが、現在は太田市と同じように七・

五・三祝い

の行事に変化してきた

稱名寺

寺号 浄土宗一行山念佛院稱名寺

本尊 阿弥陀如来【木像金箔塗り、二尺五寸、台座三尺八寸、後光十三仏入高さ四尺五

寸横幅四尺、鎌倉時代の作恵心流仏師法橋、高山の作】

脇仏 如意輪觀世音菩薩像【御丈五寸、台座一尺、作者は、日光山開祖勝道上人】

縁起・沿革・由来

『新編武蔵風土記稿』には、浄土宗、平方村林西寺末、一行山と号す。開

山一阿修得、

本尊阿弥陀。と記されている。

『武蔵国郡村誌』には、「稱名寺」村の東方字大道東にあり、浄土宗埼玉郡平方村林西

寺末派なり、『風土記』に開山一阿修得と云ふ。と記されている。

『寺の伝記』 「一」

この寺の創建は元亀元年【一、五七〇】と伝えられている。それ以前より、この地に

は、如意輪観世音菩薩の祀られたお堂があつた場所と伝えられている。

この如意輪観世音菩薩像は、あらゆる樹を以て作られた御丈五寸、台座一尺の像で、

伝えによると、作者は日光山開祖勝道上人という。この如意輪観世音菩薩像は源頼朝の

家臣千葉介種信の守護仏とされていたという。当寺の開山以前よりお堂に安置されてい

たという。伝説によると種信が藤原泰衡を奥州に征討の途次、陸羽街道を通過の時、種

信は、この守護仏の観世音菩薩像を馬の背に托して道中をされ、当所の処で馬が俄然と

して前進しなくなり、馬は狂気の如く暴れたので、種信は已むを得ず当所に観世音菩薩

像の守護仏をこの地に安置して征途につき、凱旋した際に故郷に持ち帰ることとしたが、

種信は戦場で討ち死にされたため、この如意輪観世音菩薩像は当所に遺物として奉安さ

れて、安置され寺が創建されたので、寺内に安置され現在に至っている。

「二」

本尊の阿弥陀如来像は恵心流の仏師法橋高山の作で、鎌倉時代のもの
つた

えられている。この像は当寺十四世の倫誉不退光阿順岡上人の兄が、江戸
蔵前

の板倉長三郎氏が、浅草山谷道林寺の土蔵の中にあつた阿弥陀如来像を彩
色し

て、寛延二年【一、七四九】十一月六日当寺に入仏させたと伝えられてい
る。

『寺宝』

御名号 祐天大僧正真筆御掛軸

眞福寺

寺号 浄土宗西川山廣大院眞福寺

本尊 阿弥陀如来像 立像 延宝三乙卯年三月 作者右京

脇仏 観世音菩薩像 立像 同年 作者同じ

勢至菩薩像 立像 同年 作者同じ

薬師如来像 年代不詳 作者不詳

善導大師像 年代不詳 作者不詳

圓光大師像【法然上人】年代・作者不詳

聖観音菩薩像 年代不詳 作者不詳

縁起・沿革・由来

『新編武蔵風土記稿』には、浄土宗平方村林西寺末、西川山と号す、開山榮譽慶長十九年十一月十三日示寂、本尊阿弥陀。と記されている。

『武蔵国郡村誌』には、「眞福寺」村の北方一の縄にあり、浄土宗埼玉郡平方村林西寺の末派なり、『風土記』に開山榮譽慶長十九年十一月十三日示寂すと云ふ。と記されている。

『寺の伝記』

この寺は、天正十八年、岩槻城主太田重郎氏房が、前田氏・上杉氏の両軍の攻撃により城が攻められ落城した時、千羽氏【現在の仙波氏：備後に在住】・久保田氏【現在の久保谷氏：備後に在住】・石井氏【備後に在住】・野沢氏【粕壁に在住】・伊藤氏【粕壁に在住】の家臣等十七名は、その時、夜半に乗じて一舟に乗り逃れ出て、夜明け頃に微高地となっていた場所で、椿・葦・茅・竹等が生い茂った地で前記五名の者達は舟を降り、此の処にて風雨を凌ぎ歳月を過ごすこととし、各々は百姓に身を変えて、椿・葦・茅・竹等の森を切り開き農業を始めて土着し、一寺・一社を建立した。一寺とは、西川山廣大院真福寺であって五名の者は戦陣の中にあつての修羅の巷の苦悩を救い、またこの戦いで戦死した死者の霊を弔なんがため、発願し、菩提心起してここに開基したと伝えられている。【一社とは、一族の守護神として香取社を勧請したと伝えられている。】

が定まり現在

たという。こ

老より聞かせ

者】

◎註 西川山と号するは、古代、川の流れが濫流時代を過ぎ利根川の流れ

の古利根川になり、昔の川筋の名残りとして、この付近に小川が流れてい

の川を西川と称していた。関東大震災の際この川跡が陥没したことが、故

られているところから、寺の山号に西川と付したものと推定される。【筆

『寺宝』

その他

一、地藏尊像三体

イ延宝二年・ロ元禄八年・ハ宝暦十三年

二、板碑【青石塔婆】

勝林寺

寺号 浄土宗稻荷山宝朱院勝林寺

本尊 阿弥陀如来 恵心僧都作と伝えられている。

脇仏 観音菩薩像 作者不詳

勢至菩薩像 作者不詳

縁起・沿革・由来

『新編武蔵風土記稿』には、浄土宗、平方村林西寺末、稻荷山と号す。

中興開山退誉寛永七年示寂す、伝燈総系譜に、勝蓮社退誉和尚吞龍に随学し、後当寺を開くと記しこの外のことのはのせず、と記されている。

『武蔵国郡村誌』には、村の坤の方字須賀にあり、浄土宗埼玉郡平方村

林西寺の末派なり、『風土記』に中興開山退誉寛永七年示寂すと云ふ。と記されている。

『寺の伝記』

この寺の開山は、元亀元年【一、五七〇】源笈上人の創建である。と伝えられている。

『寺宝』

木地観世音菩薩像【備後須賀稻荷神社御神体】

その他

明治六年五月七日備後学校を勝林寺に創設した。

寶 性 院

寺号 真言宗智山派香取山寶性院

本尊 大日如来像 作者年代不詳

脇仏 弘法大師像 作者年代不詳

興行大師像 作者年代不詳

阿弥陀如来像 作者年代不詳

薬師如来像 作者年代不詳

縁起・沿革・由来

『新編武蔵風土記稿』には、新義真言宗粕壁宿最勝院門徒、中興開山を俊作と云、慶長元年示寂、本尊大日を安ず。と記されている。

『武蔵国郡村誌』には、「宝性院」村の東方字根耕地にあり、新義真言宗埼玉郡粕壁宿最勝院の末派なり、『風土記』に中興開山を俊作と云ひ、慶長

元年示寂すと載す。と記されている。

『寺の伝記』

この寺の開基・開山は不詳である。隣接する『中野神社：稲荷神社合祠』の別当として江戸時代は勤めて居た。明治後期から無住で、昭和初期までは、最勝院・光明寺が兼務していたという。

西 光 寺

寺号 浄土宗大畠山撰取院西光寺

本尊 阿弥陀如来像 作者・年代等不詳

脇仏 観音菩薩像

〃

勢至菩薩像

〃

縁起・沿革・由来

『新編武蔵風土記稿』には、浄土宗平方村林西寺末、大畠山撰取院と号す。本尊阿弥陀と記されている。

『武蔵国郡村誌』には、「西光寺」村の東方字前耕地にあり、浄土宗埼玉郡平方村林西寺の末派なり。と記されている。

『寺の伝記』

この寺は、文禄年間【一、五九二（九六）】創建、開山は岷秀和尚と伝えられているが、天保二年の火災により文書等を焼失したため記録不詳

寺宝

阿弥陀如来掛軸一幅【二十五菩薩来迎】

石仏

奉讀誦普門品十萬卷供養塔【寛政十年】

西国百箇所供養塔【天保十一年】

庚申塔【天保六年】

地藏尊【宝暦四年】

その他

明治六年六月大畑学校を西光寺に創立

昭和三十年に埼玉県の無形民俗文化財に指定された『やったり踊り』で、毎年七月十五日に行なわれている。『やったり踊り』の夜大畑地区の若衆は揃いの浴衣に赤緒の草履姿で、西光寺の境内に集まり冷酒で前祝いを済ませて行列を整えて、寺から香取神社に向かって出発することになっている。

歡喜院

寺号 真言宗豊山派蓮華院善応教寺歡喜院

本尊 十一面觀世音菩薩 立像 作者年代不詳

脇仏 金剛界 大日如来坐像 作者年代不詳

胎藏界、大日如来坐像 作者年代不詳

不動明王 二体 作者年代不詳

弘法大師像 作者年代不詳

興行大師像 作者年代不詳

十六羅漢像 作者年代不詳

縁起・沿革・由来

『新編武蔵風土記稿』には、新義真言宗蓮華山禪鳳寺と云、本尊十一面

観音を安ず、江戸大塚護国寺の末。鐘楼、天明年中鑄造の鐘をかく、と記されている。

『武蔵国郡村誌』には、村の東方字屋敷前にあり、新義真言宗、東京大塚護国寺の末派なり、開基創立年未詳。と記されている。

『寺の伝記』

寺の伝えによると、開基・開山は不詳であるが境内にある宝篋印塔建立の年月を見ると寛永四年【一、六二七】四月と刻名されているので、この時期に創建されたものと推定される。

寺の五百メートル程先に薬師堂【歓喜院持】にあった鐘銘寺序に漢文でその由来を記している。【漢文は略す】

その他

境内に昭和四十一年建立した、高さ二メートル程の観世音菩薩像がある。

武里地区の寺の概要

武里地区には、近・現代になって創建された寺があるが、ここでは省略する。

尚この地区には、江戸時代に存在していたが、明治初期の廃仏毀釈令の措置により、無檀・無住の次の寺は廃止された。

還到院【備後】

『新編武蔵風土記稿』には、浄土宗平方村林西寺の末、西川山と号す、

開山栄誉、慶長十九年十一月十三日示寂、本尊阿弥陀。と記されている。
この寺は、昔の陸羽街道の道筋にあり、勝林寺の近くにあつた当時有名な
寺院であつたようだが、無壇・無住のため廃寺となつたと故老から聞かせ
られている。

真福寺【薄谷】

『新編武蔵風土記稿』には、新義真言宗粕壁宿最勝院門徒、黒谷山と号
す、本尊不動。と記されている。『武蔵国郡村誌』には、古跡、真福寺廃跡、
村の北方にあり、明治七年廃して今は共有墓地となれり。と記されている。